地域社会における人間関係構造
—生活と人間関係

上　原　貴　夫

Studies on the Structure of Human Relations in Community
——Life and Human Relations

TAKAO UEHARA ※

はじめに
1．地域社会についての視点
2．対象地域の概要
3．地区の構成を通した人間関係構造
4．まとめ

はじめに

地域社会は，伝統的には地縁的なつながりや同族的，血縁的つながり，あるいは祭祀的なつながりを軸として主に構成されてきた。このようにして構成されてきた地域において，そこに固有な民俗や文化，あるいは歴史が生まれてきた。

現代においては，このような伝統的な構成による地域社会は次第に薄れつつあるといえる。あるいは，交通や通信等の発達，そこに生活する住民の意識の変化などにより，地域社会そのものが稀薄化する傾向さえ見られる。かつて地域社会は，生活を共にし，生産を支える基盤でもあった。そこにおいて住民は多くの人々と交わり，親しく交流し，見知らぬ人とて無いほどに互いが顔見知りであった。そこでは，地域社会は豊かな人間関係の基盤でもあったといえる。

現代における地域社会は，人々の交流も広がり，また住民の生活の基盤も多岐にわたり，かつ拡大されるとともに，地域的なつながりを越える傾向にある。また，同族的なつながり，祭祀的なつながりは劣えつつある。それとともに，地域に根ざした固有の民俗や文化も次第に消えてゆきつつあるといえる。

一方，このような動向とともに人間関係はこれまで以上に複雑・多岐にわたる傾向が見られる。それは，人間関係が地域を越えて広範に形成されたり，また関係のあり方が変容されることばかりにとどまらない。かつての地域社会においては中心的な役割を担っていた人間関係であっても，既にその役割を消しつつあるものも見られる。例えば，かつて「結」（ゆい）は生産にとって欠かすことのできない重要な手段であると同時に，それは人々のつながりの象徴でも

※Doctor of Education

あった。しかしながら，現在においては生産手段の発達とともにその影は次第に薄れてきている。このような例は数多く見られる。

これに対して地域社会においてはこれまでとは異なった人間関係が様々に形成されている。それらは，趣味や同人の集まりから行政的なつながりにまでわたって実に様々である。

また，人々の意識の変化は人間関係をこれまで以上に難かしくしている。それは，世代間の断絶や相互理解の欠如などとしてあらわれている。

本来，地域社会はそこにおける独自な文化や風土を基盤としながらも，同時にそこに生活する人々の豊かな人間関係に基づいて形成されるものである。従って，現代においても地域社会を考える上で，改めて人間関係を軸とした認識が進められるべきであると考えられる。

1．地域社会についての視点

伝統的な地域社会は，地縁的結合や生産的結合，風土的基盤のもとにひとつの集合体として形成されてきた。そこでは，人々の生活がいとなまれ，生産をも含んだひとつの全体的な生活領域が形成されていたといえる。また，そこにおいては地域に固有な民俗や習慣，あるいは文化等が生み出され，維持されていた。そこでは，日常生活から生産，労働等にいたるまでがいとなまれ，慣習や習俗，しきたり等を主としながらも一定の秩序が保たれ，ひとつの社会が形成されていた。その範囲は日常生活や生産を維持する上で必要とされる領域を中心とするものであり，それは生活集落としての範囲とほぼ同一の領域であり，大きくとも一般的な通婚圏を越えるものではなかったと考えられる。

このような社会においては生活機能と生産機能は同一の領域を基盤として形成されていた。すなわち，地域社会は生活の集合体であると同時に生産の集合体でもあったといえる。逆に言うならば，この両者が一体として維持されるところに地域社会の特性のひとつがあったといえる。

しかしながら，経済および流通の拡大，活発化とともに，この両者の一体性は稀薄化してくることになる。すなわち，生産活動と生活活動の分離が次第に進行することになる。それは，初期においては，生産活動の特定の部分を他の地域に依存する形態から次第に生産活動の基盤を全面的に他に移行する方向へと進む。この移行においては，生産手段の進展も大きく影響する。すなわち，生産手段がひとりの人間による自己完結的手段から分業的な手段へと移行するにつれて，人々の流動性は高まり，それとともに，生産活動と生活活動の両領域の一体性が次第に分離する傾向を見せてくる。もちろん，このためには交通手段の発達が大きく影響することはいうまでもない。かつて自給自足的な生活および生産を主体としていた農山村であっても，交通が確保され，通勤が容易となると，人々はより大きな経済効率を求めて生産あるいは収入の糧を他に求めることになる。このようにして生活と生産の領域の分離が次第に進行することになる。

ところで，現代においては日常の生活活動も次第に従来の地域依存的な性格を脱しつつある。それは都市部ばかりでなく，農山村部においても同様である。伝統的には生活活動は，各々の

家を主体としながらも大きく地域に依存して維持されていた。たとえば，いわゆる冠婚葬祭などは特に大きく地域に依存して行なわれていたといえる。これらは，家を主体とし，その家にかかわる親族（一族）が協力し，さらにその家の近在の者が協力して維持されていた。また，共同作業による地域集落の維持，管理等も生活にとって欠かせないものであった。

しかしながら，このような傾向も次第に薄れつつある。先の冠婚葬祭などは地域に依存した端的な例であったといえるが，これらも現代においては様々ないわゆる業者に大きく依存する傾向にある。そこでは，かつて共に多くの労力を割いて協力し合った人々の姿は見られない。それらの人々は，客としてそれらに参加することはあったとしても，共に準備をし，共に実行することはほとんど無いのである。

また，地域社会における共同作業も多く姿を変えてきている。例えば，生活道路の維持であってもそれが公共施設であるという観点に立つならば，多くは行政上の管理に委ねられることになる。あるいは，私有地として私権という観点にあるものについては，所有者の意思無くして介入することはできなくなってきている。このように，生活活動においても，様々な理由を踏まえながらも，地域依存という形態は次第に薄れてきているといえる。

従って，地域社会を伝統的視点のもとに捉えるならば，その主要な特性のひとつは，生活および生産の基盤を共に支える集合体と捉えることができるのであるが，しかし，現代においてはこれら両者の一体性については非常に薄れてきている。そのため，ここでは，地域社会を日常生活にかかわる身近かな近隣社会として捉えることにする。また，そのなかで，比較的，従来から行なわれてきている伝統行事や生活にかかわる共同作業がまとまりを持って行なわれている集合体を捉えていくことにする。

なぜならば，地域社会を考えるうえで，それを形づくる一定のまとまりを持った特性は欠かすことのできない要因である。地域社会が成立するうえではその社会を形成する凝集性が必要となる。それはかつては地域的特性や生産活動，あるいはその地域に固有な文化等によって担われていた。しかし，これらが次第に稀薄化しつつある現代にあっては，これらの傾向につれて次第に地域社会自体が不分明となってきている。そのような状況のもとで，先に示したような地域においては，従来の伝統を踏まえた地域的な集合性が維持されているとともに，人々の交わりにおいてもその地域の特性に応じたあり方が示されていると考えられるからである。また，そのような近接した地域における人間関係はそこに生活する者にとってきわめて密接である。そこでの人間関係は，生活と直接に結びついた関係として形成されるのである。また，換言するならば，そのような関係があってこそ地域社会の形成が可能であるともいえる。そのため，ここでは先に示した視点のもとに地域社会を捉えることにするものである。

2．対象地域の概要

対象地域は行政的には長野県T町に位置づけられる。そのなかでも，南部に位置し，しかも隣接市との境界が間近にあるＪ区が直接の対象地域である。

(1)町の概要

対象地区が所属するT町は，昭和32年に3村が合併して形成された。その際にはそれぞれの村において隣接市町との合併を選び，いわゆる分村（あるいは分町）して現在のT町には含まれない区もあった。

●人口・世帯の推移

（各年10月1日現在）

年別	世帯数	人口			一世帯当人口	人口密度（1㎢当）
		総数	男	女		
	世帯	人	人	人	人	人
昭31	2,050	10,744	5,219	5,525	5.2	175
35	1,665	8,145	3,916	4,229	4.9	132
40	1,797	8,247	3,970	4.277	4.6	134
45	1,994	8,708	4,164	4,544	4.4	141
50	2,322	9,340	4,525	4,815	4.0	152
51	2,357	9,412	4,567	4,845	4.0	153
52	2,392	9,528	4,625	4,903	4.0	155
53	2,417	9,579	4,683	4,896	4.0	156
54	2,475	9,783	4,807	4,976	3.9	159
55	2,764	9,851	4,819	5,032	3.6	160
56	2,849	10,077	4,968	5,109	3.5	164
57	2,935	10,336	5,131	5,205	3.5	168
58	3,086	10,597	5,277	5,320	3.4	172
59	3,271	10,833	5,409	5,424	3.3	176
60	3,380	11,260	5,625	5,635	3.3	183
61	3,462	11,445	5,732	5,713	3.3	186
62	3,636	11,743	5,873	5,870	3.2	191

資料：人口異動調査
（町勢要覧より）

T町の面積は60.57㎢。昭和62年現在の総人口は男5,873，女5,870人，合計11,743人である。また，世帯数は3,636である。昭和31年当時と比べるならば，人口は1.09倍に，世帯数は1.77倍に増加している。更に，一世帯当人口は昭和31年には5.2人であったのが昭和62年には3.2人となり，世帯規模はおよそ0.6倍と縮小してきている。この推移を見るならば，人口の増加よりも世帯数の増加および世帯規模の縮小が顕著である。これには流入人口の増加にともなう世帯数の増加ばかりでなく，兄弟が同一町内に家を建ててそのまま居住するいわゆる分家的な世帯数の増加も含まれると考えられる。人口密度の推移が示すように，人口密度も低く，また合併当時は純農村地帯であったためにこのような動向による世帯数の増加が可能であったと考えられるのである。

●年齢3区分別人口の推移

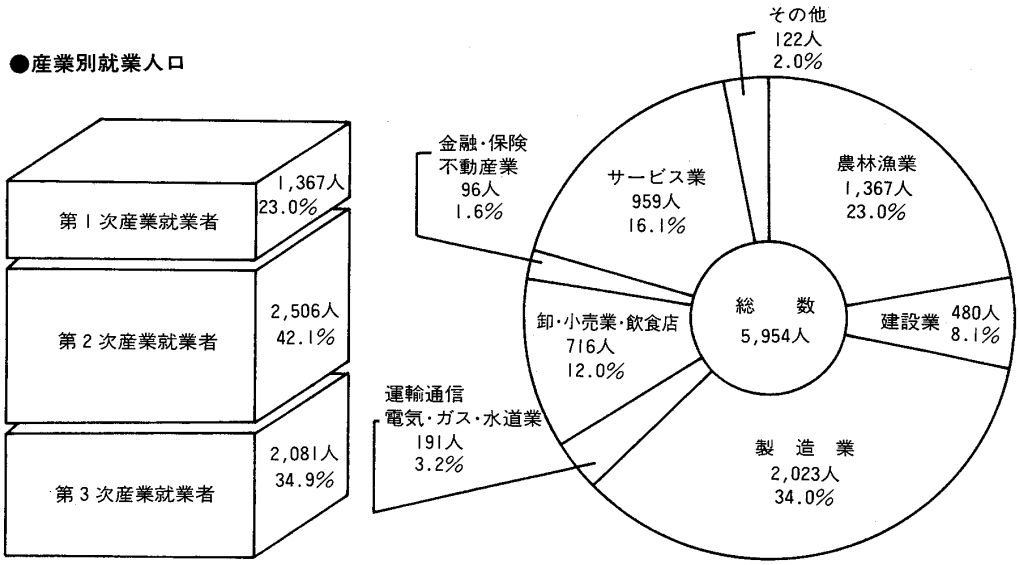
区分	昭和50年		昭和55年		昭和60年		昭和60年長野県	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
0～14歳（年少人口）	2,172	23.3	2,280	23.1	2,526	22.4	446,549	20.9
15～64歳（生産年齢人口）	6,305	67.5	6,516	66.2	7,361	65.4	1,398,750	65.5
65歳以上（老齢人口）	863	9.2	1,055	10.7	1,373	12.2	291,617	13.6
人口総数	9,340	100.0	9,851	100.0	11,260	100.0	2,136,916	100.0

資料：国勢調査
（町勢要覧より）

また年齢の構成比で見るならば，それは次第に年少人口が減少するとともに老齢人口が増加するというわが国一般の特徴を示しながらもここで目立つことは生産年齢人口がほぼ同一の構成比で推移している点である。これには，労働人口としての流入人口が考えられるが，しかしこの場合はすべて町内事業所での労働人口ばかりではない。先の人口密度が示すように，これまで比較的，人口密度も低く，そのため土地供給も容易であるために，住宅用の土地が得やすい状況が備わっていたと考えられる。このことにより居住地確保のため町外通勤者であっても，対象町内に居住するという流入人口も含まれると考えられる。

産業的な特徴を産業別の就業人口によって見るならば，第二次産業就業者が2,506人と最も多く，次いで第三次産業就業者2,081人，第一次産業就業者1,367人となっている。このなかで，第一次産業就業者が構成比の上からも23.0%と比較的高率を維持しているといえる。しかし，農家数と農家人口の推移をみるならば，両者ともに着実に減少してきている。また，専業，兼業別に農家数を見るならば，圧倒的に兼業農家が多数を占め，それは専業農家数のおよそ4.11倍となっている。

●産業別就業人口



（資料：昭和60年国勢調査）

●農家数と農家人口の推移

年別	総世帯数	総人口	農家数	農家人口	農家率	農家数	
						専業	兼業
	戸	人	戸	人	%	戸	戸
昭和45年	1,994	8,708	1,271	5,789	63.7	234	1,037
50	2,322	9,340	1,224	5,272	52.7	228	996
55	2,764	9,851	1,178	4,985	42.6	269	909
60	3,380	11,260	1,135	4,746	33.6	222	913

資料：農林業センサス
（町勢要覧より）

その他には製造業，サービス業，卸・小売業・飲食店への就業者が多くを占め，それぞれ構成比で34.0%，16.1%，12.0%となっている。これらの動向から見るならば，産業の上からT町を見るならば，農村的な特徴とともに，商工業的な特徴を見ることができるが，第一次産業就業者や兼業農家の数が示す値をみるならば，全体としては農村部の特徴を多く残しているといえる。

(2)対象地区の概要

対象地区は先のT町J地区である。J地区は，町の南部，隣接市とはおよそ100mほど離れるだけで近接している。また，江戸時代よりの街道が中央を南北に貫ぬき，往時の面影を今によく伝える。東西には県道が通る。街道沿いはかつての宿場であり，その遺構が当時のいわゆる桝形や家屋に残る。多くが住居であり，商店等はほとんど見られない。南北，東西の道路が交差する地点は合併以前の旧村の役場や統合される前の小学校，中学校，高等学校分校などがあった地点であり，かつては村の中心地であった。当時から所在するもので現在に残るのは農業協同組合だけである。しかし，この東西の県道西部には農業協同組合と接して，従来の商店に加えてスーパーや集合店舗が最近開設され，急速に商業地としてひらけてきている。

両道沿いは同一地区にありながらも，一方は旧宿場地域を中心として，当時の面影を伝える住居地として形成され，他方，県道沿いは商業地としての色彩を濃くしており，対照的な地域特性を備えている。また，両道沿いに生活する住民も，街道沿いには古くからの民家が立ち並らび，100年，200年とこの地域に居住する者が多く，これに対して県道沿いにはアパートや新興住宅地などの小規模でありながらも団地的な地域が形成されるなどにより，新たに居住する者が多いなど対照的である。更に，古くから伝えられる伝統行事（正月の獅子舞，豊作を祈る『物作り』《稲の花》，これに続く『どんど焼』，節分，道祖神祭り，秋の十日夜等）は街道沿いを中心として行なわれてきたという経緯があるなどの特徴も見られる。もちろん，現在ではこれらは全区的に行なわれているが，歴史的に辿るならばこのような経過を見ることができ，これらは両地区の歴史的な対照性であるともいえる。

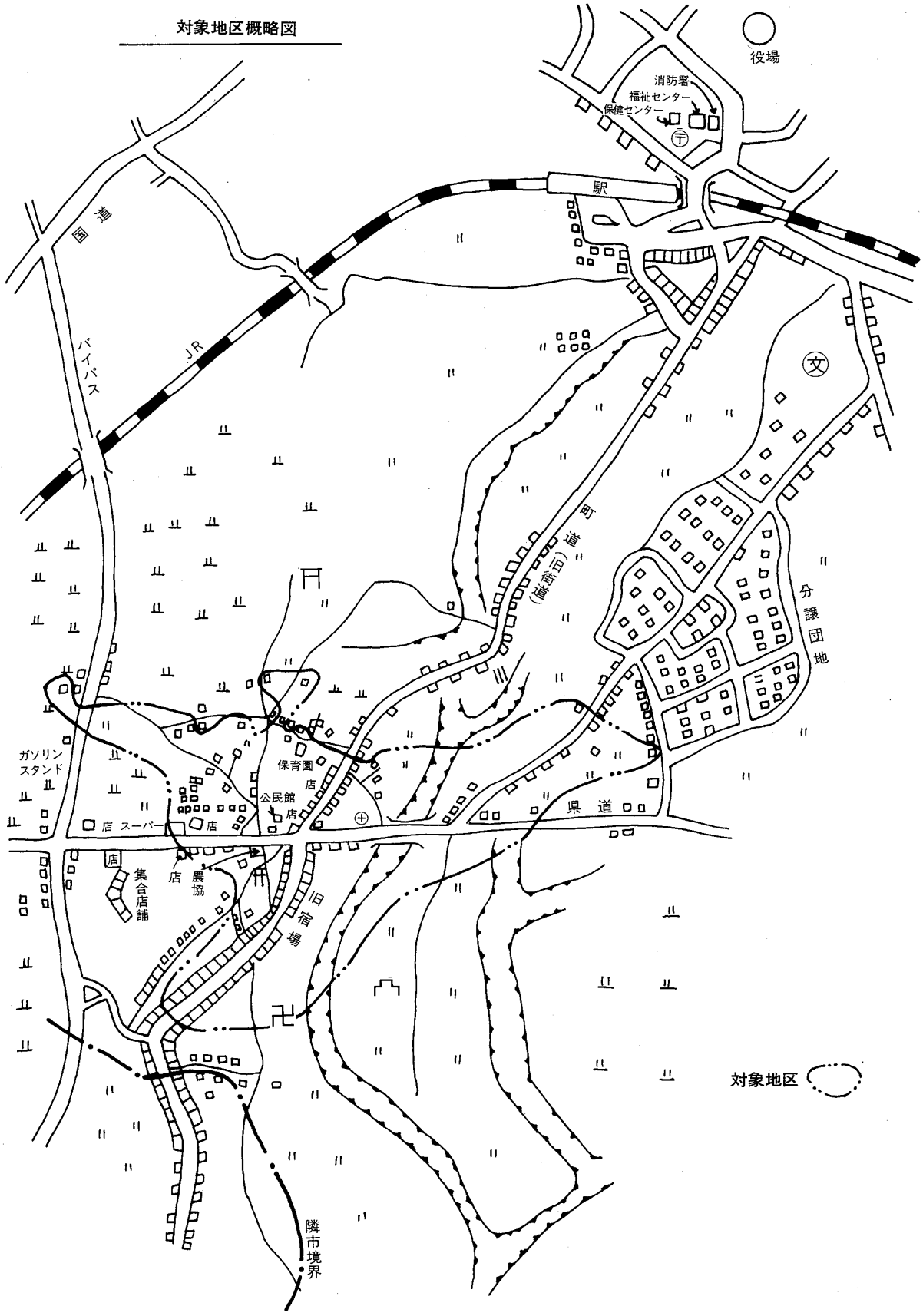
当地区に住む住民の推移は表のようになる。但し，これは，南隣のI地区も合わせたものである。それは，このJ地区はI地区とともに，同一の街道に面した地区として現在に至るものであり，そのため，両地区の交流も多く，また伝統行事にしても共通点が多いからである。なお，この地域は明治24年の国鉄開業当時は駅の開設が予定されていた。しかし，当時の事情により，駅は約1.5kmほど北に離れた現在地点に設けられた。また合併時より町の中心も駅付近に集中してきている。駅開業当時から合併時まで，この地区は町の中心として発展してきた。従って，国鉄線開通による変貌および合併による役場等の移転などがなかったならば，現在の住民数はここで示した値以上に伸びていたと考えられる。

世帯数および人口の推移

	昭和44年	昭和54年	昭和61年
世帯数	163	162	166
人　口	694	615	628

（昭和61年度町役場統計による）

対象地区概略図


役場
消防署
福祉センター
保健センター
駅
国道
バイパス
JR
町道
(福祉面)
分譲団地
ガソリンスタンド
保育園
店
公民館
店
スーパー
店
県道
集合店舗
店
農協
旧宿場
隣市境界
対象地区

J地区における商業や農業等産業面について見るならば，農家数は総数では52戸であるが，そのうち専業農家数は8戸であり，残り44戸は兼業農家である。また，農家人口は男106人，女110人で総数216人である。商店は小売，スーパー，飲食店を含めて14，事業所は農業協同組合も含めて6である。

多くは給与生活者であり，地区外，町外の事業所への通勤者が多い。これは街道沿いに居住する世帯に多く，しかもほとんどは農業との兼業である。これに対して既に述べたように，県道沿いには店舗や事業所が多く集まり，また，周辺に居住する者には給与生活を主とし，農業との兼業をしない世帯が多く集まる。周辺は，南北の街道沿いは集落で他地区とつながるが，東は畑地として，西は水田としてひらけ，地区全体を含む景観は田園地帯としての面影を現在のところは維持している。また，地区は全体として平坦地である。

地区全体の生活を伝統行事を中心として見るならば次のようになる。

1月　正月，2日獅子舞，14日物作り（稲の花—繭玉づくり），15日どんど焼

2月　道祖神—ワラ馬引き，節分，1月下旬から2月初頭にかけて1週間ほど子ども達中間休業（かつては『寒中休み』）

3月　ひな祭り　子ども達春休み

4月　お伝馬（地区共同作業），春祭り

5月　子ども達中間休業（かつては『田植え休み』）

6月　農休み（農業休暇日—地区レクリエーション）

7月　七夕，子ども達夏休み

8月　子ども達夏休み，お墓参り，お盆，盆おどり，宿場祭り

9月　秋祭り

10月　子ども達中間休業（かつては『稲刈り休み』），農休み（地区レクリエーション），お伝馬（地区共同作業）

11月　十日夜（10日—豊作を感謝する祭り）

12月　子ども達冬休み，神社・寺院二年参り

（昭和63年）

このように一年を通じて多くの伝統行事が続けられているのがこの地区の特色であるともい

える。このなかで，「お伝馬」とは江戸時代を中心として行なわれたいわゆる助郷やあるいは荷駄の中継ぎのための「伝馬」に由来する言いあらわし方であると考えられる。現在ではこの呼び名のもとに地区全体から各戸１人が参加し，地区内の道路の修理などを中心として共同作業が行なわれる。また，作業の内容によるものと思われるが，これを「道譜請」とも言っている。これが，春と秋に１回ずつ毎年行なわれ，これに参加しない家には「出不足金」と称して，一定の金額の提供が求められる。また「農休み」は田植え，稲刈りなどの農繁期が終った後に設けられ，現在ではバレーボール，ゲートボールなどによる地区全体のレクリエーションとして行なわれている。

３．地区の構成を通した人間関係構造

地域社会においては生活を通して様々な人間関係が形成されている。それらは，隣近所のいわゆるおつき合いあるいは交際として行なわれるものから同年齢集団のもの，遊び仲間や同好の者どおしの関係として形成されるものまで様々である。

同時にそこには地域社会を運営し，維持していくうえで必要な様々な人間関係が形成されている。それらは有志によって構成されるものもある。しかし，多くは地域社会としての集合体をあらわす「地区」における様々な係あるいは役員として構成される。これらはいわば組織としての特性を本来備えるものであるが，同時に身近かな近隣集団においてはそれは地区を構成する人々相互の日常生活におけるつながりを反映する傾向が見られる。また，それらの係や役員としての活動もそれらのつながりを活用して実行される傾向が見られる。そのため，地区における係や役員を通した人間関係もまたそこでの日常生活を反映した関係をあらわすことが多いといえる。

地区の運営は区長を中心として行なわれるが，この運営にあたり大きな役割を果たしているのはほぼ毎月１回行なわれている「ジョウ（常）会」と呼ばれる地区全体会である。これは，地区内の全世帯から各戸１人ずつ参加して行なわれる。いわば，区にかかわる最高機関であるともいえる。ここにおいて，区全体にかかわる諸問題，先にあげた様々な行事などについて審議および周知連絡が行なわれる。

同時に地区における活動は，「班」と呼ばれる組分けと「役」と呼ばれる様々な係によって進められる。地区全体は７つの班によって構成される。それは，地区の中央を通る街道沿いに南側から１班，２班，３班と呼ばれる。班には班長が置かれ，それらの班長によって班長会が持たれる。

「役」の任期は多くは２年である。役にあたる人数は一定ではない。それらの役は以下の通りである。なお☆印は町との関連，○印は農業協同組合との関連，△印はその他他団体とそれぞれに関連するものである。

区　長…１名，区全体を総括する

副区長…１名，区長を補佐する

会　計…１名，区全体の会計にあたる

監　査…２名，会計の監査にあたる

分館長☆…１名，各区に町公民館に対応して分館長が置かれる。

分館主事☆…原則として１名，分館長を補佐する。

班長会長…１名，各班班長による班長会を持つ。

班　長…各班１名計７名，各班の班長

図書部員☆…１名，分館（区公民館所蔵）図書の管理，町巡回図書の世話をする。

書道学級長…１名，区公民館活動による書道学級の世話をする。

体育部長☆…１名，区の体育活動，運動的レクリエーション活動を進める。

体育部員☆…２名，体育部長を補佐する。

清美部☆…１名，ゴミ回収箇所等の点検整備，地区内の美化にあたる。

保健補導員☆…２名，巡回健康診断，種々の検診等の世話にあたる。

安全協会役員△…４名，通学児童等の交通指導や交通標識等の点検保持にあたる。警察署と関連した交通安全協会に所属する。

祭事係…各班１名，対象区固有の係であり，伝統行事の実行にあたる。

農協理事○…１名，農業協同組合の理事として活動する。

生産部会○…農業協同組合活動のうち農業生産にかかわる。

花卉部会○…農業協同組合の花卉生産部門にかかわる。

老人クラブ長△…地区老人クラブ活動にあたる。

地区ＰＴＡ△…４名，学校ＰＴＡにおいて，地区活動にあたる。

氏子総代…２名，神社の維持・運営および神社にかかわる伝統行事にあたる。

檀徒総代…２名，寺院の維持・運営および寺院にかかわる伝統行事にあたる。

消防団☆…団長を中心とし有志によって結成される。Ｉ区と合同による結成。

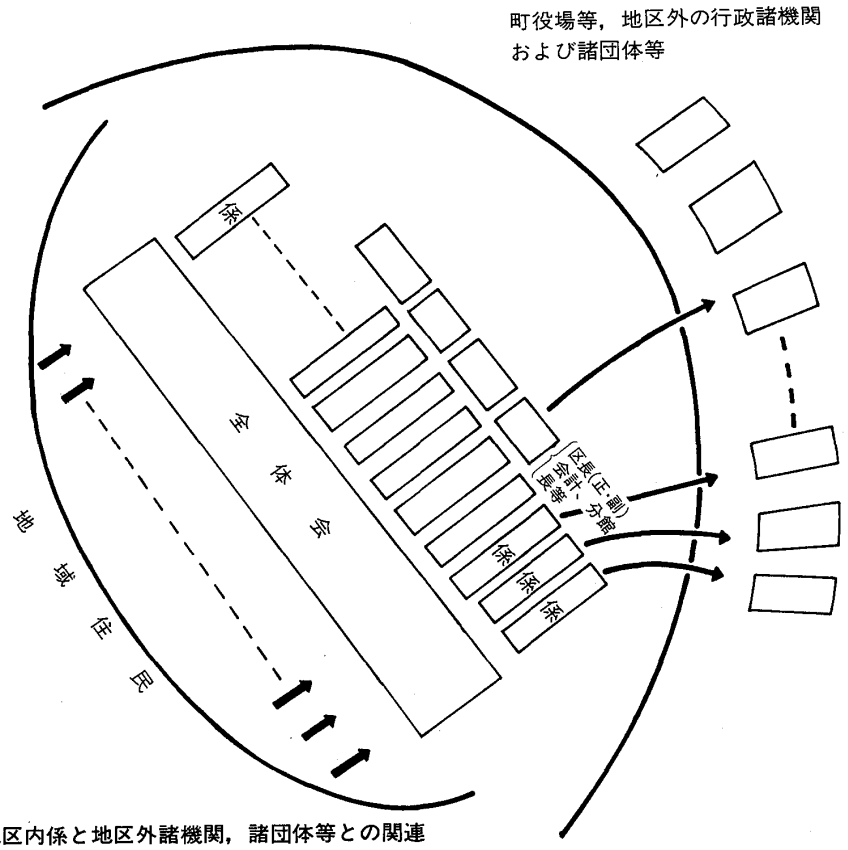
ここでは地区における主要な役とその活動を概略的に示した。役の状況を見るならば，町や農業協同組合，交通安全協会など地区を取り巻く他の機関や団体と密接につながりを持つ役が設けられている点が見られる。たとえば，分館長は分館主事とともに，地区内における公民館活動にあたるとともに，町内各地区の分館長による分館長会を通して町の公民館活動にもかかわり，同時に町の公民館活動と地区の分館活動との連絡・調整をはかる。体育部の役は，「農休み」などの区のレクリエーション活動においてスポーツ活動の立案等を行なうとともに，同時に町主催で行なわれる町民体育大会（町民運動会）においては地区内からの選手の選出や町民体育大会での対戦の組合せ，当日の競技準備，選手の手配なども行なう。また，安全協会の役は，地区警察との関係のもとに構成される交通安全協会にも同時に所属し，交通指導等にもあたるのである。このように今日における特徴として，一方では区内における活動を中心として考えられている役（係）がある反面，他方においては町や他の機関，団体との関係のもとに活動が進められる役も見られる。

すなわち，このことは地区における活動であっても，町や関係機関，団体との関係のもとに進められる傾向が多いことをあらわす。しかも，この傾向は年々その部門や範囲が拡大する傾向にある。時にはそれは，地区の活動ばかりでなく，町の行政や関係機関の役割の一部を担うほどになってきている。たとえば，町では昭和63年秋よりゴミの回収が実施されることになった。これに対しては，清美部の担当でゴミ収集地点の設置，管理，ゴミの仕分け方についての指導等が行なわれることになったのである。また，区長は原則として毎月１回開かれる区長会に出席するが，これは町役場において開かれ，担当職員のもとに町との連絡・調整がはかられている。この区長会では，様々な事柄が連絡および審議されるとともに，その結果は区に持ちかえられ，関係の役に伝達されるとともに，時には区の全体会（ジョウ会）にはかられることになる。

このように，地区における活動は，年々，行政や関係機関，各種団体などとの結びつきが強められている。従って，これらの活動を通した地域の維持・運営は，いわば地区内における係(役)活動とともに，それらがかかわる行政等関係機関との関係のもとに二重構造によって進められているといえる。このような関係は，単に活動の連絡・調整等に留まらず，各種の手当てや補助金，あるいは活動費等の給付にもおよんで形成され，その結びつきは従来に比べて強められている傾向にあるといえる。

ここで，これらの関係をモデル的に図にあらわすと次の図のようになる。

このようにして見るならば，地区の構成は地区の特性に応じた形成がはかられながらも，地区を取り巻く町や関係機関等との関係のもとに二重構造によって捉えることができるといえる。従って，人間関係の観点から見るならば，地区内においては，様々な役（係）活動を通した人間関係のネットワークが形成されるとともに，それらは地区を取り巻く関係機関のネットと密接に結びついているといえる。このような二重の構造による役活動は，一面においては活動の広がりを意味するものである。また，地区がより広い社会体系に位置づけられていることを示すものでもある。これにより，活動が地区を越えた広がりを持って実行されるための可能



地区内係と地区外諸機関，諸団体等との関連
についての概念モデル

性も維持されるのであり，また，社会的位置づけを得ながら，資金面においてもある程度の基盤を持ちながら展開されることにもつながる。しかしながら，反面においては地区（地域）の独自性，あるいは固有の実情，特性が薄れることにもつながる。地域においては独自な慣習や風土などが伝えられているのであり，それらの上にその地域に固有な状況が出来上がっている。人々は，そこにおいて生活しているのである。また，地域の発展においても，その発展が地域の住民生活に根ざして実現されるためには，これらは無視できない要因である。

とりわけ，現代においては地域社会においても行政との結びつきが強くあらわれてくる傾向にある。それは生活の様々な面にまで及ぶものである。このような状況は，地域における生活であっても，社会のシステムに位置づけられて展開されることを意味し，行政的な基盤が得られることを意味する。しかしながら，それが画一的に実施されるならば，地域社会における独自性，独自の文化や風土等を維持・発展させていく上では必ずしも肯定的な基盤とはなり得ない。地域の独自性を生かした調和的な関係の形成がより一層，重要となる。

ところで，役活動自体は地域社会がいわば組織立てられた集合体として維持される上に大きな役割を果たすものである。そのため，そこに形成される人間関係も一面においては組織関係あるいは係関係として，組織や係の活動を通して形成されるものである。もちろん，役活動を

通した組織としての人間関係も見られるが，同時に実際には，地域社会における活動は，係や役が設けられていても，それらは多くの場合は発案者，立案者として責任者的立場の者が定められているにすぎないことが多い。実行者はあくまでもそれ以外の住民に依存するという形態が多いのである。すなわち，立案者としての「役」があり，実行者としての住民がいるという関係が出来上がっているといえる。そのために，「役」を果たすためには，役以外の住民との人間関係を円滑に保つことが必要となる。なぜならば，「役」として立案したことであっても，それを果たすためには実行者としての大多数の住民との親密で円滑な関係があってはじめて可能であるからである。しかも，そのような関係は，日頃の日常生活を通して形成されるものでなければならない。そして，実行者としての住民は同じ地域を生活の基盤とする者でありながらも，「役」に関しては多くの場合は自由な状況にある。この自由な状況にある人々を実行者として「役」を果たしてゆかなければならないために，日頃の日常生活における人間関係のあり方はより一層重要となるのである。

また，地域社会においては，このような役を通した関係ばかりでなく，様々な関係が形成されている。友人関係や趣味，同好の仲間による関係ばかりではない。古くから続く伝統ある地域では，「跡継ぎ」という形で多くの長男が生活する。それは，同年輩，同級生としての集団あるいは仲間関係を形造る。また，同族集団的な色彩を色濃く備えた「くるわ」あるいは「マケ」といった人間関係，同一苗字の家が集まった関係，あるいはいわゆる本家と分家等といった関係，古くから住みついている者と新規に居住者になった者との関係などが様々に形成されている。

このような意味では，地域社会においてはフォーマル（formal ;形式的）な人間関係とインフォーマル（informal ;非形式的）な人間関係とが，まさに混じり合って形成されていることになる。しかも，それは年齢的（世代的）にも，生活形態の上でも，あるいは価値観の上でも，様々に異なる者によって形成されるのである。これら，異なる人々によって形成されるフォーマルおよびインフォーマルな人間関係のもとに進められてゆくのが「役」活動であるといえる。この役活動は更に，多くの場合は，行政や他の関係諸団体との二重の関係のもとに形成されているのである。

4．まとめ

地域社会を形成・維持していく上で，その地域社会における「役」による活動が大きな役割を果たしている。その「役」は地域住民によって担われる。それらは，現代においては，行政や他の関係機関，諸団体との関係のもとに運営，実行される傾向にある。そのため，役活動は，地域内における活動として地域住民との関係を形成するばかりでなく，地域外における様々な機関との関係のもとにあるという二重の関係のもとに実行される。

また，多くの場合，「役」は立案者あるいは責任者的な位置づけをあらわすものであり，実際の活動の実行は地域住民によって担われる。ここでは，立案者と実行者という関係が形成されることになる。しかも実行者は自由な状況のもとに生活する住民である。ここには様々な形で

インフォーマルな人間関係が持ちこまれる。そのため「役」の活動においてはフォーマルな人間関係とともにインフォーマルな人間関係が混合して形成されることになるのである。そのため，役の活動を果たすためにも，日常生活での人間関係が重要となる。

現代における地域社会は，それを取り巻く様々な関係機関との関係のもとに形成されている。それは地域社会が広く社会に位置づけを得ることをあらわすものでもあるが，そこでは地域の独自性を生かした関係が形成されることが重要となる。また，地域に根ざしながらも開かれた人間関係が形成されることが重要となる。